

## 法政大学-漢字から日中両国文化の共通点を探る

北京師範大学学生代表

見学日時：2015年11月27日（金） 14:30-20:00

見学場所：法政大学



### 法政大学の紹介

法政大学は本部を東京都千代田区に置く、著名私立大学である。

法政大学の設立は、1880年設立の日本で最初の私立法律学校である東京法学社に遡る。その後1920年に法政大学と名を改め、現在まで135年の歴史を有している。同学は東京都内の五大名門学府「MARCH」(M:明治大学、A:青山学院大学、R:立教大学、C:中央大学、H:法政大学)の一つである。また日本の文部科学省が選定したスーパーグローバル大学事業(中国でいうところの、大学の国際的知名度向上のための211や985等の計画)37大学の一つである。

同学の法学部および社会学部の歴史は非常に古く、同学は日本の私立大学で初めてこれらの学部を設置した大学である。同学の前身の東京法学校と当時の専修学校(現在の専修大学)、明治法律学校(現在の明治大学)、東京専門学校(現在の早稲田大学)、英吉利法律学校(現在の中央大学)は明治五大法学校であった。その後1950年に工学部が開設され総合大学となった。また同学は日本航空と提携、日本で最も影響力のあるパイロット養成機能を持つ総合大学でもある。

同学は1904年に清国留学生法政速成科を開設した。汪精衛、宋教仁、楊度、胡漢民、曹汝霖、孔昭綬、朱執信、湯化竜、古応芬、そして『猛回頭』や『警世鐘』の著者である陳天華、および元最高人民法院院長で「七君子」の一人である沈鈞儒等多くの速成科卒業生は、いずれも中国の政治や教育の近代化を担った傑出した人物である。

## 見学概要

午後、私たち訪日団メンバーは中華日本学研究会副会長兼法政大学教授の王敏氏による「漢字文化と日本」および「留学文化と日本そして法政大学」をテーマとした講座を拝聴した。王敏教授はまず日中両国の言語に共通する漢字から両国文化の共通点を見出し、次いで儀礼祭祀、中国の古典、教育、日本の大禹文化、漢字の実用価値、教科書等の面から深く日中両国文化心理の共通点を探り、さらに胡漢民、宋教仁、廖仲愷、沈鈞儒、董必武といった近代に法政大学に留学した歴史上の人物について紹介をした。王敏教授の講座内容はとても豊富で、また核心をついており、私たちは日中両国文化の密接な関係と長きに渡る歴史についてより認識を深めることができた。

夜は懇親晚餐会であった。私たちは美食に舌鼓を打ちながらも、様々な問題について王敏教授の見解を伺った。和やかな雰囲気の中、皆は王敏教授に感謝の意を伝え、最後に記念撮影を行った。

## 知っていますか？

### 1、上海万博における日本館の愛称「紫蚕島」の由来について

この愛称は王敏教授が名づけたものである。

日中両国文化の観念において、「紫」は「高貴」の意味があり、「蚕」には復活、長寿、永久、魔除けの意味がある。日中両国は古代いずれも男耕女織の文化であり、中国の黄帝の妃で養蚕の始祖である嫫祖は「蚕神」と崇められており、蚕形の副葬品「勾玉」などがある。そして日本の『古事記』には、皇后が養蚕を行い、天皇は春に種をまき秋に収穫するという記述があり、今日まで続いている。「島」は日本の地形と関わっている。日本には古来より「東瀛、大島、洲、扶桑、倭、大和」等の別称があり、中国には「忽聞海上有仙山(そのうち海上に仙人の山があると聞き及ぶ)」の古詩が存在する。

日本館の建物外観は薄い紫色で、そのドーム式の形状は大きな蚕の繭のようであり、また蚕には長寿の意味が込められている。蚕の繭から出る糸を使った絹織の技法はまさしく中国から日本へ伝わったものであり、日中間の「密接な繋がり」の象徴である。

### 2、済南碧筒杯

碧筒飲とは、新鮮なハスを茎の途中で切り落とし、そのハスの葉に酒などの飲み物を注ぎ反対側の茎の切り口の部分から葉に注いだ酒などを飲むものであり、夏の暑さを癒すのに最適なものである。別名「蓮杯」、「蓮盞」、「碧筒杯」と呼ばれ、また茎の形状が象の鼻に似ていることから「象鼻杯」とも呼ばれる。

王敏教授の長年の研究によると、中国で失われたものの多くが日本にはいまだ存在し、しかも古跡としてではなく、現代の日本人の生活様式として存在している。例えば、日本には世界で唯一の餃子の記念碑があり、また済南人には比較的馴染みのある「碧筒飲」は祭日のパフォーマンスとなっているが、日本では「碧筒杯」と呼ばれ、現在までこうした方法でお酒が飲まれている。

### 3、八咫鳥(三足鳥)と神農

王敏教授曰く、日本では八咫鳥(三足鳥)のイメージが人々に根付いている。最も典型的なものとしては、日本サッカー協会のシンボルマークに八咫鳥が採り入れられている。王敏教授の研究によると、日本人の八咫鳥信仰は中国の三足鳥信仰がその原型となっている。漢の時代の画像石には西王母の隣に常に三足鳥がいる様子が描かれている。

また中国の神話についても、日本では神農を祀る伝統が残っている。大阪や東京などでは毎年神農を祀る行事が行われている。特に大阪では神農信仰が強く、大阪の「神農祭」は大阪市無形文化財(民俗行事)に指定されている。

### 4、日本の大禹文化信仰

「四書五経」において「禹」は31回登場する。大禹は「四書五経」が日本に伝わった後、日本人々により発展そして普及した。大禹の治水の功績を祀る儀式もその名残の一つである。

2010年11月27日、日本で最初となる全国禹王まつりが神奈川県開成町で開催された。2012年10月20日には第2回の全国禹王まつりが群馬県の名勝地である尾瀬で開催され、2013年7月6日には第3回の全国禹王まつりが高知県高松市で開催された。大禹は中華の地に幸福をもたらしただけでなく、現代において日本と中国を結ぶ架け橋となっている。またこの全国禹王まつりは、2013年以降は毎年大禹に所縁のある場所において順に開催していくとのことである。

多くの聖人や賢人の中で大禹が崇拝される主な理由は日本の風土の特徴と関係している。知ってのとおり日本は古来より地震や水害が多く、人々の生活において最も優先すべきは地震対策と水害対策であった。原始的な農業生産を主としていた当時の日本にとって、大禹は加護を祈る神であり、また人知を超えた技能を持つ科学者であった。人々は大禹の水の通りを良くすることを主とする治水方法は日本でも必ず通用すると固く信じていた。そして今日でも日本の土木建設業界は大禹を開拓者と崇めている。また日本の伝統競技である相撲においても、その代表的な土俵入りの姿勢は大禹の治水時代の地固め(足で力強く土を踏みしめる動作)を基にしたもので、日本語でも「禹歩」と呼ばれる。



## 感想

まずは外国語を媒体とし自国の優れた文化を広めるために自国文化をしっかり理解することの重要性を認識させられた。

外国語を学ぶ私たちは、外国文化を学ぶと同時に自国文化に対する理解を疎かにしがちである。外国語を学ぶ目的は本来外国とより良く交流することであり、もし私たちに相手に伝えられるものが無ければ、「相互交流」は一方向的なものになり、本当の意味での交流とはならない。王敏教授は自国文化への理解を土台とした上で日本文化を研究し、さらに両者を比較分析することで、日中両国に文化的繋がりや理解という架け橋を構築した。私たちもこうした点を目指の一つとし、自国の優れた文化そして外国語を学んでいくべきだと思った。

そして、日常生活における細かな観察とそれに対する研究についても考えさせられた。王敏教授は生活において様々な些細な点を見つけ、それを研究することに長けている。私たちも日頃から自身のそのような能力を磨いていくべきだと思った。